

令和5年度 第2回飯田市総合教育会議会議録

日 時 令和6年 2月 26日

午前10時00分開会

場 所 飯田市役所 A301－302号会議室

1 開 会

○林企画部長

ただいまから、令和5年度第2回総合教育会議を開催いたします。

本日司会を務めさせていただきます、企画部長の林と申します。よろしくお願いします。この総合教育会議ですが、市長部局と教育委員会が教育政策について協議・調整する場ということで、様々なテーマに基づきまして、年2回開催をさせていただいているものでございます。

2 あいさつ

○林企画部長

それでは、まず最初に佐藤市長からごあいさつ申し上げます。よろしくお願いします。

○佐藤市長

おはようございます。今年度第2回目の総合教育会議ということで、教育委員の皆さんにはお集まりいただきありがとうございます。また、日頃から飯田市の教育について中心になっていただきありがとうございます。

総合教育会議の説明が林部長からありましたが、教育は、教育委員会の方にお任せするというのが基本ですけれども、市長部局と教育委員会が協議・調整する場として総合教育会議があります。由来は大阪のいじめ問題があった時に、少し教育の場にも市長部局との調整が必要なのではないかということで設けられた仕組みということです。

元々の由来からすると、学校教育の現場は大丈夫なのかという視点かもしれませんが、今回は、社会教育をテーマとすることを市長部局からご提案をさせていただきました。これは、令和5年第4回定例会で特にそうだったのですが、コロナ禍を経る中で、地域の繋がりや地域力が低下しているのではないかと、あるいはそこから防災力、地域が何かあったときにお互いに支え合う力が低下しているのではないかとという問題意識の質問がかなり議員からありました。それは私も感じており、心配や懸念があったので、「令和6年度は自治基本条例や公民館活動、あるいは田舎へ還

ろう戦略といったことをもう一度、学び直した上で再構築していきたいと思っています」と答弁をしました。そうした矢先に、今回の令和6年能登半島地震がありました。能登半島地震の様子を見ていても、地域の繋がりや、地域の自治力がある所とない所の避難所の運営の様子、あるいは復興、復旧の様子に差があることが見て取れました。そうしたこともあり、改めて、飯田市の社会教育、公民館活動が今どのような状況にあり、これからどうやっていけば良いのか、ぜひ皆さんと意見交換をしたいと思い、社会教育、公民館活動をテーマとして提示させていただきました。

教育委員の皆さんには、日頃、学校訪問をしていただいていますけれども、公民館活動は大人の分野ということもあり、もしかしたら日頃あまり触れてない部分があるかもしれません。今回認識を共有させてもらいたいということでテーマを設けさせていただきました。皆さんから見た公民館活動や社会教育の様子をお聞きして、先ほど申し上げたようなテーマに対して、令和6年度にどう取り組んでいくのか認識を揃えられたら嬉しいと思っています。少し長くなりましたけど、今日の趣旨を申し上げまして、挨拶に変えさせていただきます。本日は、よろしくお願いいたします。

○林企画部長

ありがとうございました。続いて熊谷教育長からご挨拶をいただきます。

○熊谷教育長

改めまして、おはようございます。私も大津事件の事をよく覚えておりますが、あの頃、教育委員会の判断力や決断力が非常に大きな話題になりました。飯田市の総合教育会議はそういった面ではなく、子どもたちのため、地域のために市長部局の皆さんと教育委員会がどうやって力を合わせてよりよい方向を見出せるかという会議になっているなど感じています。

今日は公民館活動あるいは地域の担い手の育成に向けてというテーマであります。学校で言うキャリア教育がまさにそのものではないかと思っています。いま飯田市は学校のあり方審議会等で進めていますが、やはりリニア時代を迎えるにあたって、学校が魅力ある場所、魅力ある学校になっていく必要があるのではないかと感じています。そうした中で大事なことは、地域と連携したコミュニティスクールですが、その仕組みを生かしたものがキャリア教育であり、公民館や地域の皆さんとコミュニティスクールを作っていくことがとても大事な点と日頃感じています。その先にあるのがまさに今回のテーマではないかと感じています。私も地域住民の1人として、また、学校現場に携わる者として、今日のテーマと一緒に考えたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

○林企画部長

ありがとうございました。

3 意見交換

新たな地域の担い手の育成に向けて～社会教育の視点から考える人材育成の未来～

第1クール 社会教育の視点から、地域の担い手の育成における課題認識について意見交換

○林企画部長

ありがとうございました。

それでは早速3番の意見交換に移ってまいりたいと思います。今回、テーマは、次第にございますように、「新たな地域の担い手の育成に向けて」とさせていただき、サブテーマを、「社会教育の視点から考える人材育成の未来」とさせていただいております。進め方につきましては論点を2つに分けて進めてまいりたいと思います。

1回目のポイントとして、地域の担い手の育成に向けて、社会教育の課題、公民館や自治の現場における課題等について、委員の皆様方から見た視点で、意見交換をお願いいたします。

2回目のポイントは、社会教育の今後の方向性、取組などについて意見交換させていただきます。それぞれのテーマに基づきまして、関係部局から資料をご用意させていただいておりますので、その説明をお聞きいただいた上で意見交換をお願いします。特に発言に順番は設けておりませんので、ご自由にご発言いただければと思います。

それでは、まず最初に、社会教育の視点からの課題認識ということで、説明を教育委員会からさせていただきます。

○上沼副公民館長

よろしくお願いします。飯田市公民館の上沼です。それでは社会教育のこれからについてご協議いただくに当たり、外から見て飯田市の社会教育がどう捉えられているかという資料を用意させていただきました。資料No. 1をご覧ください。飯田市の社会教育に対する外部、特に大学の研究者等からの評価と現在公民館が向き合っている課題について説明をさせていただきます。実は飯田市や飯田市の社会教育に関心を持っている大学の研究者等は多くいらっしゃいます。毎年多くの研究者や学生が学習、調査、研究などで飯田を訪れております。年間延べ600人程度お越しになっていると聞いております。そのような飯田に感心や価値を持っている大学研究者のネットワークづくりとして、平成23年1月に学輪IIDAを設立しておりまして、飯田を起点に大学研究者同士が相互につながり、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデルや研究や取組を当地域で行っております。飯田に興味や関心を持つ先生方が訪れる中で、「飯田は学びの宝庫であり、可

能性を持っているまちである」と、そう評価される先生方がいらっしゃいます。飯田は、大学、研究者、学生にとって住民自治やまちづくりを学ぶことができる格好の場であると。様々な場面で市民による主体的な活動が活発に展開されていると。また、市民と行政の協働によるまちづくりが展開されていると。例えば公民館活動においては、公民館は施設ではなく活動、公民館をやるんだという、そういった住民の意識ですとか、公民館の活動を支える方針や体制がしっかりと担保され、人材を育む規範、仕組み、土壌などが飯田には存在し、機能しているのではないかと、そう評価される先生方や、またいいだ人形劇フェスタにおいては、コンセプトである「みる、演じる、ささえる、トライアングルステージ」この考え方ですとか、「みんなでつくる、参加証ワッペン方式などの取組は他にはない事例である」とそう評価をされています。

このほかにも、飯田においては環境面、環境モデル都市の取組ですとか、産業面、航空宇宙産業の取組ですとか、観光面、体験修学旅行や農家民泊といったグリーンツーリズム、こういった様々な分野でモデル的な取組が展開されていると。なぜ、地方都市飯田でこのような取組が活発に展開されているのかが、大学の研究者たちにとって研究や学習のテーマになっています。

また、学輪 I I D A の取組におきましても、様々な大学の学生が飯田で一緒に学ぶことができるモデルカリキュラムの展開や、地元の高校生が大学の先生方に学んだり、大学生とともに学ぶ、高大連携による次世代育成の取組、また、市民、学生、大学研究者がともに学ぶ学びの輪の講座、「学りんご大学」の取組など、様々な活動が展開されており、「そのような地域はなかなかないよね」とそう評価をされています。

また、そのような活動が飯田で展開されている背景にあるものとして、先生方から発せられる言葉としては、「住民の主体的な活動の源泉である結いの精神やムトスの精神がしっかりと根付いている地域ではないか」と。また、飯田は話好き、理論好き、世話好きが多かったり、人の良さ、醸し出す雰囲気惹かれるといったそういった人柄に着目をされたり、「外部の人や事を柔軟に受け入れ、自分たちのものにする寛容性といった進取性、学究性に富んだ地域ではないか」と。そういった飯田の風土や気質に着目される先生方もいらっしゃいます。

また、飯田には、豊かなソーシャルキャピタル、社会関係資本とも言いますが、地域や社会における人々の信頼関係や結びつきが強いと。「この蓄積がまちづくり、文化活動、環境活動など、様々な活動につながっているのではないか」と、そう捉えていらっしゃる先生方もいらっしゃいます。「飯田には、自然資源、文化資源、人的資源を蓄積し生み出していく場があるのではないか」と。「その場を形づくる多彩で総合的な営みがあり、そのコアとなるのが自治の意識と仕組みではないか」と。そして、「飯田における社会教育、公民館活動等がこの一翼を担っているのではないか」と評価をされています。

学輪 I I D A においては、毎年全体会を開催し、飯田のこれからの可能性などについて検討する機会があるのですが、そのような認識のもとで、「飯田は持続可能な地域社会のモデルになれるのではないか」と、そう評価される先生方もいらっしゃいます。

「飯田の課題は、日本や世界の課題であり、飯田での深掘りが日本や世界の深掘りにつながっていくのではないかと」「飯田の持続可能な社会モデルが日本や世界のモデルにもなり得る」と。

「飯田が有する社会教育的な素地を育み、活かし、これからの時代に即した形であらゆる領域で連動し、その営みをバージョンアップしていくことができないかと、大学の研究者がそこに関わることでないか」と。「飯田にはそのような可能性がある」と、そう評価をされる先生方がいらっしゃいます。そのように評価をいただいている飯田市、また飯田市の社会教育であります、一方、公民館におきましては、取り巻く状況、課題もあると認識をしております。社会環境の変化や価値観の多様化などにより、住民の地域や地区に対する意識、関心は薄くなってきている、そういう傾向があるのではないかと認識をしています。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、分館も含め、公民館の学習、交流活動も制限されるなど、「地域における人と人とのつながり、また、地域とつながる機会が減少した」こともありまして、「公民館活動がなくても困らない」とか、「うちの分館は今年は飯田人形劇フェスタの実行委員はちょっと難しいかな」と、一部の住民や公民館の委員等の発言があるなど、やはりコロナの感染拡大は人々の意識や地域のコミュニティに少なからず影響を与えたものと認識をしています。

一方で、コロナ禍で活動が制限される中、公民館の活動の目的や事業内容を見つめ直す機会にもなりました。昨年5月より新型コロナの法的位置づけが変わり、各地区においては運動会や文化祭など様々な活動が再開される中、全てを元に戻し、これまでと同じように実施するのではなく、現状に即した形で事業を実施するなど、様々な工夫も行ってきたわけでございます。公民館としましては、人や地域とのつながりを大切にした学習や交流により、地域の中で互いに関係性を持ち、心地よく暮らしていける地域、そういった地域の実現を目指していきたいと考えておりまして、地域に誇りや愛着を持つ人材を育むために、公民館における学習交流活動のさらなる充実を図っていききたいと、そう認識しておるところでございます。公民館からは以上となります。

○林企画部長

それでは続きまして、市民協働環境部から地域の状況についてご説明をさせていただきます。

○橋本市民協働環境部長

市民協働環境部長を務めております橋本と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私からは、地域自治組織についてということで、現在の状況について説明をさせていただきます。

す。資料 No. 2－1をお願いいたします。それではまず1の地域自治につきましては、今の地域自治の置かれている状況、概要について記載してございます。現在、地域を取り巻く環境でございますけれども、少子高齢化や快適な生活環境の整備など、様々な課題を抱えておりまして、このような状況の中、地域をよく知る住民の皆さんが中心となり、住民同士が助け合う地域づくりと、住民と行政の協働によるまちづくりが大変重要と捉えています。

続きまして、2の地域を取り巻く環境につきましては、その背景と課題について、具体的な内容を記載してございます。まず、背景におきましては、社会構造の変化と地域社会の変化に分けて、まず社会構造の変化では、少子高齢化と人口減少の進行、情報化社会の進展、そして男女共同参画社会の形成、また年金支給開始年齢の引き上げによる定年延長がございます。これにつきましては、生活家計重視の動きがあります。

続いて地域社会の変化におきましては、核家族化や価値観の多様化、そして地域コミュニティの希薄化。3つ目に地域の連帯感や地縁に対する意識の低下がございまして、特に価値観の多様化におきましては、ご近所付き合いよりも個人の生活を重視する、そうした価値観に変化していると捉えています。こうした背景のもと、現在の置かれている課題でございますけれども、一つには地域の担い手の不足、また役員の担い手不足がありまして、そうした担い手が不足している中で役員の負担感が生じてございまして、3つ目には自治会の存在の希薄化、そして組合加入率の低下が挙げられてございます。

こうした課題の解決に向けまして、今後の取組としまして、特に3つの取組を挙げてございます。一つには、自治基本条例の学び直し。2つ目には、20地区田舎へ還ろう戦略の事例の共有と学びの取組。そして3つ目には、地域を担う人づくりの取組でございます。

特に3つ目の地域を担う人づくりの取組につきましては、公民館と連携いたしまして、人づくり、人材育成の取組を進めてまいりたいと考えておるところでございます。

続いて、3の持続可能な地域づくりの推進につきましては、各地域各地区により、人口や規模等事情が大きく異なることもございまして、それぞれの伝統や歴史、個性や特徴を大切にしながら、地域づくりを地区とともに進めていきたいと考えております。

最後になりますが、別紙でお配りしてございます資料 No. 2－2をご覧くださいと思います。こちらは自治会加入のチラシでございまして、組合未加入の方に対しまして、組合加入促進の取組に活用するものになります。参考に添付させていただきましたのでまたご覧ください。説明は以上になります。よろしくお願いいたします。

○林企画部長

ただいま、2部局からご説明をさせていただきました。先ほどの市長の冒頭のあいさつや今の

部局の説明を受けまして、ご発言をお願いしたいと思います。評価をされている部分もございしますが、なかなか現状としては厳しい課題も抱えているというお話もございました。公民館活動や地域活動、担い手の育成のような部分で、委員の皆様方の捉え方や課題と思われることなどを中心にご発言いただければと思います。どなたからでも結構でございます。説明へのご質問でもかまいませんので、ご発言ある方は挙手をいただければ、ご指名させていただきたいと思います。それではお願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

今まで学校教育の面からが主だったのですが、社会教育の視点から新たな地域の担い手、育成に関わるというようなテーマで意見交換できることを個人的には楽しみにしていました。

今、説明がありました現状やその課題は、私自身も地区の公民館とかまちづくりの係を十数年ずっとやらせてもらって、自分は常に「末端活動員」なんて言っているのですが、今も末端活動員をやらせてもらっているという中で、地域の中にも本当に実感しているところです。特にこのコロナ禍前までは、前の年までやっていたから今年もそれをやるのはある意味当たり前という、そういう流れでできていたのですが、コロナ禍で中断を余儀なくされたことを経て、以前までの行事の継続とか、地区内のまちづくりの委員とか公民館の役員の依頼にも本当に苦労するといったことが顕在化してきたというのは確かです。ですが、コロナ禍を逆手にとってビルド・バックベターと言いますか、コロナ禍前にはなかった新しい頼もしい動きが始まっているのを、最近感じることもいくつかあります。このことについては、後ほど今後の可能性といったところでその例を紹介させていただいて、今後につながればというふうに思っているその部分が楽しみと言った理由です。

先ほどの説明にもありましたが、少子高齢化とか、人口減少とか、70代になっても健康な方は働いている方が非常に増えているといったようなことで、今後を見通すと、従来のままの行事とか、役員会のあり方が基本で当たり前だとする考え方を変えていく必要があるというふうに思っています。少し強い言い方をさせてもらおうと、従来どおりにいかないから課題だと考える、そのこと自体が課題だと、私は思っています。例えば、学校のあり方とか、地域におけるスポーツ活動、芸術活動等の進め方とか、不登校生の学びの場づくりとか、よりよき方向への改善策を手探りしながら、今、変わりつつある。当然、社会教育においてもそういう変革が求められるのは当たり前だと思っています。飯田市のこれまでの社会教育、例えば公民館等の取組を外部の学者の皆さんが評価してくださっているというお話があった。それはとてもありがたいことだと思います。ですが、地域の皆さんは、外部から評価されることを目的に活動してきていたわけではなく、地域として、またはその個人として、本当に必要があつて、粛々と取り組んできた熱意や工夫が

外部の方から見れば評価につながっている。そのことが活動している方たちにとっても励みになっているということだと思っています。外部の評価と地域の人の意識に若干のギャップがあるというように聞こえたのですけれど、そういうふうを受け止める必要はないのではないかと考えています。つまり外部の評価を得るために活動しているのではなく、自分たちが本当に地域で楽しんだり、良かれと思って取り組んだりしたことの結果が、幸い外部の評価にもつながっているということかと思っています。

それで、第2クールでお話をする前置きとして、今後に向けて目の前にある課題に向かう短期的な取組と、それから中長期的に育成していく学校教育段階からのつながり、そういうような段階を追っていくことが必要ではないかと考えています。いずれにしても、今まで経験してきたことから、社会教育の一番の根幹を自分なりに一言で言えば、とにかく「楽しい、面白い、参加して良かった」ということが感じられることではないかと考えています。だから今、関わっている人や大人たちが楽しそうにやっていれば、そこには人が集まってくるし、それを見ている子どもたちもその背中を見て育つのではないかと考えています。子どもたちにとっても例えば親が地域の中で楽しそうに位置づいて、お祭り等の時に、地域の周りの大人の皆さんと飲んでいてもいいんですけど、楽しそうに地域の中に溶け込んでいる親の姿を見ると、子どももすごく安心・安定するというふうに思っています。そういう姿を子ども心に見ると、親の新たな面を発見したりとか、頼もしさを感じたりとかという、自分自身にもそんな経験があります。したがって、今、役員や公民館に関わってやっている人たちが苦しいとか、役が回ってきたからかなわないと言って活動しているその状況がもしあるとしたら、当然それを見ている次の人は、自分もそこへ飛び込んで一緒にやってみようという気持ちにはなれないだろうと思います。場合によっては大変な時もあるかもしれませんが、まずは、やっている人が楽しそうにというか、自分たちが楽しむ状況をどうつくっていくかということではないかと考えています。たくさん例があるので、この続きは後ほど時間が足りないくらいお話したいと思います。

○林企画部長

ありがとうございます。課題と捉えるよりも、より良くするための機会と捉えるという視点ございましたけれど、そのほかどなたかいかがでしょうか。それでは、野澤委員さんお願いいたします。

○野澤教育委員

先日、公民館大会の基調講演を聴かせていただいたのですが、あの話を聞いていて一番感じたのは、自助、共助、公助かなと思いました。まず、自ら助ける、そして協調性を持って助ける、最後、公共が助ける、こういう順番が、自らが行動して初めてなしえることという意味だと思い

ます。私は、飯田で育っていないのでよく分かってないのですが、横須賀という街で育ったと時のことをずっと思い返していたのですが、子どもの頃何があったかなと思ったら、町内対抗のソフトボールや県民運動会があったなと思いました。今も横須賀にいる友達に聞いたら「もうそんなのないよ」って言っていましたが。北澤さんがおっしゃったように、昔は本当に大人たちに娯楽がなかったのだと思います。今はそういうことをしなくてもたくさん刺激があつて、個々に楽しめてしまう。これが大きな社会の変化なのかなと思います。先ほどの防災という観点からすると、自治は必要だよねっていう部分は確かにそのとおりだと思いますけれども、そこにどうやってそれを結びつけるかが、今回の会議の課題なんだろうなと感じています。公民館活動が是なのか非なのかというのは全く分かりません。ただ、もう社会では核家族化が始まったというのはその通りで、黒電話から携帯電話になり、それがスマホになっていったときにどんどん個々に切り刻まれていく社会になっていて、親子が同じ屋根の下で生活してても、子どもが何しているか分からない社会ですよ。なので、そこに持ってきて、「みんな一緒に何かしようよ」っていうのはどうなのだろうと。今の社会の現状を考えると、地域社会が一緒になって何かするというのは本当に難しい課題だなと思います。しかし、それがないといざ何か危機があったときにはまずいよねっていう観点からすると、やっぱり何かしていかななくてはいけない。順番としては、自助、共助、公助でやっていかないと続かないと思います。自分からやっていくことで長期間それが継続できる。その矛盾をどうやって解決するんだろうというのは、私にはアイデアがないですけれども、行政の立場で公民館活動でこういうことをやったらどうだい、ああいうことをやったらどうだいてやっても多分続かない。そこにいる人たちが「やっぱこれやらんと困るよな」「これやったら楽しいよね」といった感覚がない限り続いていかないという感じがします。

うちの組合でも同じような話があつて、お子さんたちが楽しめるなんとか委員っていうのがありますね。その委員が一生懸命やっているときはものすごい活動していて、毎週のように子どもたちを集めていろんなことやっていたのが、委員さんが替わったら年に一回もやらなくなってしまった。なせかと言うと、「そんなの面倒くさい」、「大変」だって。「前の委員さんがやっていたようなことを私はできない」と言って終わってしまうんですよね。それでいいのかなとも思うのですが、そのうちそういうところが「困らない」って書いてありました。本当に困らないんだと思います。だから「楽しみ」だけでやっていくのではなくて、違う次元で何かを仕掛けていかないといけないのかなというふうに感じます。

○林企画部長

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。林委員さん、お願いいたします。

○林教育委員

社会教育の視点からということで、課題というお話でもあったんですけども、本人は地域自治を担うっていう意識があってやっていることではありませんけれども、中学3年生の娘が公民館に大変お世話になっています。その最初のきっかけが、東野の公民館の「子ども寺子屋」です。春と夏に3日間いろんな勉強を見ていただきたり、いろんなイベントをやっていたり、そういう形で子どもたちを30人預かりますといったものです。最初に、そこに小学生として参加させていただいたのがきっかけかと思うのですが、中学生になりましたら、今度は見守る方のボランティアというか、運営側に回らせていただいて、もう全然考える余地もなく「私行くね」という形で。常に公民館に関わらせていただいているのは、寺子屋がきっかけだったのですが、それ以外にも中学校の地域の運動会でアナウンスをさせていただいたりもしました。これは中学校から依頼を受けて、「誰か中学生やってくれない」、「その東野地区の中学生やってくれない」ということで、受けさせていただいたり、その流れで今度は「文化祭の司会の補助でもやってみない」なんて声をかけていただいて、娘は公民館大好きになっちゃいまして、主事さんとか、館長さんとか、まちづくりの委員長さんとかみんなと顔見知りになって、帰り道に顔を出して雑談して行くみたいな。でも、そういうのを許していただく土壤があるというか、みんなが楽しみにそこに寄っていけるような形で、娘だけではなく帰り道が一緒だった子どもたちもちらっと寄っていった話しかけて、みたいな形で公民館に携わらせていただいていると。携わるというよりはただ遊びに行っているだけで、本人の意識としてもただただ楽しいからやっていると。これきっと先生でも親でもない大人に認めていただくっていうことが大きいのかなと感じています。

また、北澤職務代理もおっしゃっていましたが、その場にいる大人たち自身がとっても楽しく楽しそうにやっていると。東野公民館の寺子屋では、運営側の大人をみんな下の名前で呼ばせたり、「ミキティ」とか年上なのに「たかしちゃん」とか呼んだり。「まちづくり委員長だよみたいな、ええ、いいの」と感じなんですけれど。そんな感じで世代間の垣根を取り払って、そうやって関わらせてもらえると。

きっかけはすごく簡単なことでしたけれども、それをきっかけとして娘はいろんなことに興味が出ました。例えば人形劇フェスタのボランティア、赤十字の募金活動、やまびこマーチのボランティアスタッフみたいなのを全部やってみたいと言って、何でも出て行くようになりました。これ公民館のおかげと言い切って良いのか分かりませんが、そうやって地域の大人と関わることがとても楽しいという経験をしたのかなあというふうに私自身は思っています。ただ、4人兄弟でそんなことやっているのは娘だけで、長男とかは特にはやってないので、きっかけ

はすごくちょっとしたことなんですけれども、そうした経験を課題という捉え方で見ると、うちの娘だけではなく、ほかの全ての子にそういう機会があったらいいなと思います。学校と家庭だけの往復、あるいは塾とか同世代、あるいは親、先生だけではない地域の大人と関わる機会が一部の子だけではなく、全ての子どもにそういった機会があるといいのになと思いました。学校教育の中で、職場体験やキャリア教育の推進でいろいろな人と関われる機会を与えてもらっているのですが、さらに自分の住んでいる地域、例えば斜め前に住んでいるおじさんとか、そういった方とも交流を図れるっていうのが、公民館の大きな力だと思いますので、私自身は可能性というものを感じておりますが、やはり課題としてはそれが一部にとどまっているというところかなというふうに思っております。

○林企画部長

ありがとうございました。続いて三浦委員、お願いいたします。

○三浦教育委員

社会教育の視点から教育を考えるということでテーマをいただいたときに、正直「本当にこれは難しいテーマをいただいて困ったな」なんて思いました。今、自分が地域で何をやっているのかなと思ったときに、松尾の八幡町区の婦人部の会計を初めてやったりだとか、地域のお祭り神輿会に出て行ったりだとかいうことが浮かび、80歳過ぎの母親に「公民館活動ってどれになるのかな」という話を恥ずかしながらしたところです。そうしましたら「それは区でしょ、公民館活動というのは区の活動の中にあるんじゃないの」「例えば、敬老会は区でやるよね。その後の芸能祭は公民館の人が挨拶をしているから公民館なんじゃない」などと母が言うのです。昨日ちょうどお茶を飲みに来た幼なじみが、彼女は本当に地区のことや地域でいろいろな役をやっている友達で、「明日こういうわけで公民館活動について意見を言わなきゃいけないのだけれど、公民館活動ってこの区の中では何なんだろう」と聞いたら「えっ、何がそれに当たるのかな」と言うのです。私が何を感じたかという、地域の中の人たちにとっては、地区でやっていること、公民館でやっていること、市でやっていること、その区別は曖昧で、全てが自分たちでやっているという認識の中で動いているんだということです。活動の主体を区別するっていうのが、なかなかどうして難しい。地区の活動を長年やってきた母にとっても、そして地域の中で活動している友人にとっても、地域で自分たちが行っている活動に区別がない「あっ、そういうものなんだな」ということを感じたところがあります。それがすごいところなのかなと。今回のテーマに、社会教育に公民館活動と括弧付けで書かれていましたので、公民館活動って何なのだろうと思い、改めて考えましたけれども、その地域の中で生活している人たちが自分事としてやっている、そういう中にあるんだなと、そんなふうにも思いました。いろいろな社会状況の変化ということは、自

分も感じると思います。この間の公民館大会で分散会に出て、分館の方たちとワークさせていただいたときも、区でいろいろ話合いをしたときに、PTAの方から「楽しいことしてくれなくてもディズニーランドに家族で行くからいい」と、何か集まってやろうと思っていても、「ああ、そうかって悲しくなるんだよな」というお話を聞くと、「ああ、そうなのかな」っていうふうに思ったりします。時代背景があるのかなと思ったりもしますが、私の祖父が飯田の大火で焼け出されて、今の家がある松尾というところに来た時に、「この地域はまとまっている地域じゃなくて、結構よそ者で入ってきた人が何人かいる中で、『みんなで協力してまとめ上げた』っていう、そういったことをおじいちゃんが話していたよ」ということを母から聞いたりすると、課題というのは今だからあるのではなくて、その時その時にやっぱり課題があって、それはそれぞれの地域の中でコミュニティを形成しようという力で改善され、培われてきたものなんじゃないかなと。またそれはどこの地域にもあるのではなく、飯田市はもともとそういう土壌がある地域なのかな、なんて思います。なので、冒頭にどここの大学から評価されてなんていう説明から入りましたが、それは本当に大切なことで、専門分野の方たちがそうやって飯田市の地域の活動を評価してくださる、これは地域のコミュニティを継続していこうという活力にもなるので、評価をいただくことは大切なことだと思いますが、冒頭に北澤職務代理が言われていたように、「評価されることが目的ではない」という事は確かで、地道に市民がいろいろ自治としてやってきたことが副産物としてたまたま評価を受けた。いろいろな公民館活動ができるっていうことは、地域の中でそういったコミュニティのまとまりがあるので、公民館活動が根付いている。地域の人たち、市民は割と自分たちがやっているっていう意識の中で活動しているのかなということをととても感じます。

コロナ禍でいろいろな活動が停滞してしまったというのは、何においてもそうで、自治活動以外のところでも本当にそうなんじゃないかなっていうことはすごく感じています。さっき地元のお祭りのお話をしましたが、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行されてもクラスターは出しちゃいけないということで、かなり気をつけて、最後の慰労会の時には瓶ビールは注ぎ合うからやめて缶ビールにした経緯がありました。そうしたら、お祭りが明けた反省会で「瓶ビールじゃないと困る」と。「缶ビールは自分たちで飲んで完結してしまっただけで注ぎに回れない」つまり「交流会ができなかった」という反省が出ました。地区としてはクラスターを出してはいけないという思いがあったわけですが、地元の「元に戻したい」という力が働いているんだなということを感じました。コロナ禍が明けたから、元の交流ができるような体制にしたいという力を確かに地域は持っているなと感じたわけです。コロナ禍もあり、停滞してしまったものはあると思いますが、これからそれを元に戻そうという力は確かに持っている。でも、負担なくできると

いう経験も確かにしています。やらなくてもいい部分も確かにあったかもしれない。そういったところが、今度は合理的な良い形で、その地域のやり方としてできあがっていくのだろうと思います。でも、それは「今だから」ではなくて、うちの祖父の話をしましたけれども、その時もその人たちができることを、できるふうにやってきたのではないかと思います。

飯田市の自治基本条例について、母親や友達に聞いたりする中で、組織が分からなかったのもそのホームページで文面を読んだり、組織図を見させていただきました。区とか常会といったものがあって、そこからまちづくり委員というのを選出して、そして地域自治っていうものができていてというところも、今回このテーマをいただいたことで、いろいろなものを知る機会をいただきました。その条例内に「可能な範囲内で、個性や意欲を発揮することができる」という文面がありまして、そのできる範囲内で自分の個性や、意欲を発揮できるという、そういう場が条例にきちんとうたわれていて、そして組織図の中で、区とか常会とかの位置づけはとても小さいものではありましたが、逆にそこが本当は大きくて、そこに地域自治活動っていうものが浸透していて、そういった土壌があるからいろいろな活動ができていて、そんな土壌を持っているのが飯田市で、そんなところを外から評価されて年間 600 人の方たちがこの地域に学びに来ているんだなと思いました。

もう 1 つ、課題ではないんですけど、飯田市キャリア教育に行ったときに、子どもたちの発表の中に、「本気の大人に会う」とか「やってみよう」と背中を押してくれている大人に出会う」とか、そんな言葉がありました。先ほど林委員も言われていましたけれども、そういった大人との交流とか自分のやっていることの背中を押してくれる、「本気でやろう」と言っている大人を見ることができる、そんな大人と一緒に活動できる、これっていうのは本当に大切なことなんだろうなあとと思いますし、何よりも子どもたち自身がやることも大切ですけれども、そういった楽しく活動している大人たち、精いっぱい楽しんでいる大人たちを目の当たりにするという経験は地域の中で大切なものではないかと感じています。今回このテーマをいただき、本当にいろいろ知らなかった自分にも気づきました。

○林企画部長

ありがとうございました。続きまして熊谷教育長、お願いいたします。

○熊谷教育長

私も課題を共有させていただいて、さっき野澤委員さんがおっしゃいましたが、昔と今とやっぱり違うよなど。最近テレビで昭和 31 年と今の令和の時代とでタイムスリップするドラマがあって非常に人気があるということで、私も観てみたのですが、確かに非常に面白いなど。昭和 31 年頃と今の時代とで価値観が全く違う。要するに昔は、人がベタベタベタ付き

合ったりするのが当たり前の時代で、それは確かに助け合わないといけない時代でもあったんじゃないかな。私も小さい頃に公衆電話が我が家にあって、そこに地域の方が「電話借ります」って来たようなそんな時代があった。今は一人一人が携帯電話を持っている。そのドラマでも娘にかかってきた電話を親が勝手にとって、「今、いません」っていう、要するに過干渉じゃないんですけれども、そういうの当たり前の時代で、その時代のその違いっていうのはすごいなって改めてテレビドラマを観ながら実感をしています。

そういう中で、いろんな組織が今、存在が難しくなっているなというのがあります。私も元教員ですが、教員は教育会という自主組織をつくっています。あるいは同好会といって、教科ごとに自分たちの教科について勉強する会をつくったりしているのですが、私が現場にいる頃に一番課題があったのは、その組織率がだんだん下がっていく事です。若い人たちを誘おうとすると、「それに入って何のメリットがあるんですか」ってこういう答えが返ってくると。メリットというと「支え合い、助け合いだからそれはいつか自分がしたことが自分に返ってくる」みたいな説得しかできなくて。でも、それは結局若者を説得する力にはならない。そういう時代の変化をすごく感じていて、私が若い頃は先輩に入るんだと言われたら入ることが当たり前になっていて、先輩方は「強いられし恩寵」と言って強制的にやらされたことなだけで、後になってみると入って良かったなって分かる。それが恩寵だと。ある意味主体性がないと言われればそうなんですけれども、でもそこに入って勉強して、勉強はやっぱり大事だなと後で実感するっていうような、そういう時代でした。今は人參が先にあって、何のメリットがあるかが見えないと、一緒にやろうというふうにはなかなか難しい時代になっているなあということが大きく背景にあるかなと。

また、もう1つ背景として考えられるのは、昔より余裕がないんじゃないかな。昔は子育てにしても、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんがいて、預けながら子育てはできたし、農業が多くて、自分で自分の時間を融通できる。今は定年延長もあって、またサラリーマンの方も多くあって、60歳を過ぎて「役職をお願いします」といっても「ちょっと無理です」っていう、自分もそういうふうにお断りをしたことがあって、なかなか難しい現実もあります。

自分の地域でも神社総代を頼むのは次に人の頼んでも誰も受けてくれないので、決め方を変えなきゃ駄目だと。もう回り順で強制的に回すしかないみたいなそんな提案もされていたり、婦人部では毎年2回飲み会をやっていたのが、「もう物価高騰だし1回にしましょう」とこの間決まったとか。身の回りではそういうことが当たり前に起こっていて、やはりそれは時代の変化、コロナ禍による価値観の変化っていうことは非常に大きいなと感じているところです。

じゃあ、どうすればいいかというと、お話しいただいたときに余裕がないと、なかなかじゃあその仕事を受けましようかっていうふうにはならない。特にご家庭を見ていると、就学援助がど

んどん増えていますし、子育ての世代の皆さん方も非常に窮乏している感じがしているなど。PTAの活動もそうですけれども、地区によってはなかなかそのPTA活動に出られないとか、PTA会長は受けられないとか、そういう課題もあつたりします。やはりそういう現状からすると、その余裕がないっていう状況も1つの要因になっているのかなと、感じています。そういう意味で、先ほど林委員からお話をいただいたように、東野の公民館は早くから「そういう寺子屋やりたい」って言ってやっていて、最初は学校の中に教室を空けてそういう場をつくろうって考えたようですけれども、公民館のほうで「すぐ近くに公民館があるんだから」と言って、そちらへ作ったという経過を聞いております。今から見ると逆に外へ作って良かったんじゃないかなって思ったりもいたしました。やはりそういう体験の機会というか、単にその人の話を聞くだけではなく、実際に一緒にやったりする体験がないと、ただ理屈を言われても動かないんじゃないかなっていうようなことも、今のお話をお聞きしてても感じました。

○林企画部長

ありがとうございました。佐藤市長、お願いします。

○佐藤市長

今、教育長がおっしゃった「何のメリットがあるんですか」というのは、公民館活動もそうだし、自治会活動もそうなんですけれども、そう言われるとなんと答えればいいのか。

この間、片山ニセコ町長のお話を聞く機会があつたんですけど、すごく印象的だった言葉は、「この何十年間の間に、行政は住民の自治の力を奪い続けてきてしまったんじゃないか」という話があつて、いろんなことを行政がやるようになってきている。それはもちろんいろいろな事情があつて、草刈りが大変だとか、なんとかっていう話を受けて、じゃあ行政がやりましょうかっていうのを受け続けてきた結果として、昔だったらみんなで時間を出し合って、力を出し合ってやっていたことをやらなくなった。その結果として、行政が住民の自治の力を奪ってきてしまっているんじゃないかという反省があるというようなことをおっしゃっていました。

もちろん、このことは、時代に合わせて適合しているというか、行政も自治会側も変化をしているということなんだろうが、結果として、住民の皆さんたちが本来持っていたであろう繋がりがある程度奪ってしまった、これは非常に罪深いところがあるという趣旨のお話があつて、先ほど野澤委員が自助、共助、公助っておっしゃいましたけれど、公助が大きくなりすぎると自助がどうしても小さくなるし、共助はもっと小さくなる。これまで行政は、サービスだと思っていることをやってきており、やるかやらないかは、お金があるかどうかの話をしてきたが、そうではなくて、行政の拡張が自治の力を奪うかもしれないと片山ニセコ町長の話聞いて、納得しました。

冒頭のごあいさつでも申し上げたように、今回の令和6年能登半島地震で、自分たちで何かできる地域とそうじゃない地域が鮮明に分かれているというのは、ある意味、行政が自治の力を奪ってしまったところもあったということなのかもしれないので、令和6年度に学び直して行こう、地域の力といった話を改めてしていかなければいけないと思っています。

今、各委員から自分たちの地域活動の経験だとか、身の回りの話をされましたが、飯田にはまだまだそういう力が残っていると思いますし、それをやっていく土壌は飯田には多分まだ残っていると思うので、今の時代にあった公民館活動だったり自治活動にしていくか考えれば、課題ではあるんですけれども、おそらく前向きにまだできるんじゃないかなという気はしています。

三浦委員のお母さんがおっしゃったように、どこまでが公民館なのかというのはすごく良い話だと思いながらお聞きしました。それが意識されなくても地域でできているというのはとても良くて、これは公民館だ、これはまちづくりだって、あまり切り分けてしまうと、結果それがそれぞれ萎んでいくと思っています。知らないうちにそれができている状態というのがある意味良いのではと思います。松尾地区はその点ができているかもしれないし、東野の公民館の話を聞いてうらやましいなと思いました。子どもたちが公民館に顔出しているっていう話を聞いたことがない。すごく素晴らしいなと思いました。だからそういういろんな土壌が、各地区に残っていると思うので、そういう意味ではまだまだ大丈夫かな、やり方次第かなっていう気はします。

○林企画部長

ありがとうございました。ここまで、今の課題といたしますか、現状も踏まえた中での話をいただきました。

今、市長からも話がありましたように、確かに公民館自体もかなりできた当初から比べると分業化されてきたというか、昔は何でも公民館が抱えて課題として取り組んできたものが、だんだん公民館の役割が整理されてきたというところもあるのかなというふうにお話をお聞きしておりました。また、行政と住民の活動の境目を、行政と住民の距離が近いというのも飯田の特長であるということも外からの評価にもありますが、行政と住民の協働していく仕組みみたいなものを、昨今の現状を踏まえ考えていくかという話もあるのかなとお聞きしたところでございます。

第2クール 地域の担い手を育成していく上での社会教育的アプローチの可能性について意見換

○林企画部長

それでは、第2クールとして、社会教育の今後の方向性ということで、今後の取組に向けてこんなような視点で取り組んだらどうか、具体的な方法等もあればご発言をお願いします。

それでは、意見交換に先立ちまして、今、ムトスぶらざの取組が盛んになってまいりましたので、こちらの報告をさせていただいて、意見交換に入りたいと思います。それでは、教育委員会からお願いいたします。

○上沼副公民館長

今後の公民館の取組を検討いただくに当たり、ムトスぶらざにおける学習・交流・実践活動の様子について紹介をさせていただきます。飯田市公民館においては、飯田市の駅前に移転したということで、高校生や若者が集いやすいという地理的な利点を活かしながら様々な活動を行っているのですが、今回3つの事例について紹介をさせていただきます。

まず1つ目は、「高校生講座」です。この講座は、高校生が地域に誇りと愛着を持ちながら、広い視野で自分や飯田のことを捉える、そんな人材の育成を目指し取り組んでいる事業です。高校生が、地域における学習、またカンボジアや東北での現地学習を通じて、様々な取組やそれに関わる人々の想いに触れる学習活動を展開する。それをしっかり振り返る中で、自身や地域のあり方を考える、そういった学習活動を高校生の主体性や協働的な学習を大切にしながら展開をしています。講座の最後に高校生の発表、報告の機会があるのですが、その際に高校生の発言や意識の変化を見るに貴重な学びの機会になっているのではないかと認識をしています。

2つ目に「ふらっと会議」の開催です。誰でも自由に参加できる対話の場として、毎月一回開催をしているものです。自分の興味、関心や実現したいことを持ち寄りましょうと。そして協働をして取り組む中で、「ふらっとライブ」やクリスマスなど、参加者の想いが実現する創発活動につながっているものです。

3つ目が高校生等若者ワーキングの取組です。創発コーディネーターマネージャーを中心に、高校生等が自分のやりたいこと、実現したいことを仲間と共有し、実現する活動を支援しており、その取組を関係機関とつなげることで、例えば高校生による「水引のプランニング」や「ビジネスプランコンテスト」の取組などに繋がっているということです。

このように、高校生や若者、多様な主体が学習や交流を通じて繋がりを持ちながら思いを形にしていく。こういった活動は、公民館においても新しい形での事業展開で、今後も充実を図っていきたいと考えています。

それでは、資料 No. 3-2 になります。これからの社会教育のあり方、可能性を検討いただく参考資料として、第4期教育振興基本計画、これは文科省が策定した令和5年度から9年度までの教育の羅針盤となる計画ですが、本計画における社会教育の役割を確認する上で、諮問機関である中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理資料が分かりやすいのではないかと思います。用意をさせていただきました。本計画では、社会教育の果たす役割を学びを通じて人づくり・

つながりづくり・地域づくりの循環を育み、持続可能な地域コミュニティを支える基盤となるものと整理をしています。また、人生100年時代、またVUCA時代、これは変動性とか不確実性、複雑性、曖昧性の英語を重ねた文字になる言葉ですが、将来の予測が困難な時代を迎えるに当たり、社会教育は従来のこれまでの役割に加えウェルビーイング、これは身体的、精神的、社会的に良い状態であることを意味する言葉ですが、その実現ですとか、社会的包摂の実現、デジタル社会への対応、地域コミュニティの繋がり形成の役割がより重要になると整理をされております。

地域コミュニティの基盤形成に向けては、リアルとオンライン双方で、地域住民がつながる場として、公民館などの社会教育施設を活用しながら、住民同士がともに学び合う社会教育を推進すること、そして、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動へ地域住民が積極的に参画するなどの取組を一体的に推進することで、学びを通じて、人と人とがつながりや絆を深める、そういった活動がとても重要になってくると整理をされています。そして、生涯学習や社会教育の振興方策として、公民館等の社会教育施設の機能強化、社会教育人材の養成や活躍機会の拡充、地域と学校との連携、協働の推進などを取組の柱と掲げています。例えば公民館等の社会教育施設の機能強化においては、公民館の役割を明確にし、住民が相互に「繋がり」を持てる共同学習や交流を促進し、地域コミュニティの基盤を形成することが求められています。説明は以上です。

○林企画部長

ここからは社会教育の視点から人づくり、地域づくりにどのように取り組んでいくのか、今後のアプローチ等についてご意見をいただければと思います。どなたからでも結構ですのでお願いいたします。

○佐藤市長

資料 No. 3－2の最後の「今後の生涯学習・社会教育の振興方策」で、公民館等の役割を明確化すると書いてあるけれど、これはどういう趣旨なんでしょうか。というのは、先ほどのこれは私の仕事、これはあなたの仕事と分けていくことは、良いことがないわけではないけれど、これは公民館の仕事じゃありませんからといったような話を公民館が言い始めると。飯田の場合、よく「公民館的手法」と言いますが、様々な人の関わりの中で物事を解決するみたいな、そういうのが公民館のある意味でもある。運動会とか文化祭の何が良いのかと言うと、そこで地域にみんながいるんだねと言って見いだされた人が活躍することにある。それが、公民館は「ここまで」というように明確化するのが良いとは思わないということです。そういう違和感をこの資料に感じました。文部科学省がそうやって言っている趣旨がちょっとどういうことなのかなという気がします。元々、飯田ほど公民館活動がない地域で、公民館の本当の役割を発揮するという意味なら役割の明確化ということですね、きっと。

○林企画部長

どなたかいかがでしょうか。三浦委員、お願いいたします。

○三浦教育委員

この間の公民館大会のときの分館の方たちとの分散会の時に、川路の分館の方からの発表があったのですが、その方は羽場地区で生活をしていて、家庭を持って川路のほうに出てきて、そこで分館の活動をしているという話でした。そういった公民館活動というか、地域の活動に対して、自分が出て行くというのには「自分がその羽場地区にある家族、お父さんの存在があった」っていうことをちょっと言われていたかと思うのですけれども、そういったお父さんの地域での活動の状況を見ていた。そして、自分も家庭を持って家を建てて、川路に出てきた。その時に自分がそういった地域活動をやる事に違和感がないといえますか、自然とこの地域の中でコミュニティをつくっていく形というようなお話があったと思います。

先ほどもいろいろな話の中で、「大人と子どもとの関わり」って林委員も言われていましたし、私も飯田市キャリア教育推進フォーラムの中で「本気の大人に会う」とか、「背中を押してやってみようという大人に会う」という話をさせていただきましたけれども、やはりその地域の中で自分たちの目の前にいる大人の姿、地域のことをやっている大人の姿を、今の若い世代の人たちが小さな時から見ていることが、その地を離れたとしても、自分のいる中で地域をつくっていくという発想になるのかなというふうに思いますし、そういった生き生きとできる範囲のところで、そういった活動をやっていくとする大人の姿を子どもたちが見るとするのは、本当に大切なことなんじゃないかなと思います。その川路の分館の方の発表の中に、「運動会を行うときに参加者のできる種目で行う。この種目だから出るのではなくて、参加する人たちがやりたい種目で構成するんだ」というようなお話もありました。

今回の会議にあたり自分の本棚を見た時に、波多野誼余夫先生という教育心理学の先生の本があり、自分が学生の時に読んだその先生の本をもう一度読んでみました。「参加者のイニシアティブを尊重していくということはとても必要」というのがありまして、やはり上からこれをやるとか、毎年続けているからこれなんだということではなく、さっきの運動会の種目もそうだけれども、やりたいもの、できること、そこに種目を組んでいくとか、参加する人たちのやりたいといったところに視点を置くっていうことは大事なかなと。

今の話をした波多野誼余夫先生の著書に『知的好奇心』という本がありまして、その本の中で「知的好奇心や向上心というものは、子どもも大人もすごく持っているもの。」「やらされるという強制ではなくて、内発的にやりたいんだ、楽しいんだというところから出てくる。」と言って、これは飯田市自治基本条例も「できる範囲で、自分たちの個性や意欲を発揮できる場所」

なんていう言葉があると先ほども申し上げましたけれども、そんな形で自分たちがこれやりたいんだ、楽しいんだ、参加できる人たちはこういうことだったらできそうなんだという、上から「公民館活動はこれをやる」ではなくて、うちの母が「どこまでが公民館か分からない」なんて言うてしまうように、自分たちがやっているんだっていう意識で、飯田市のそういった活動の土壌だからこそ、「自分たちがやりたいこと、やるべきだと思ったことをやる」っていうところを、やはりよく尊重しながらいろいろ考えていくことが大切だと思います。いろいろな時代背景があって、個が大切にされコミュニティはどうなんだ、こういったことに意味があるのかというようななんとなく難しい話もありますけれども、そんな中でもやはり上から押しつけられて嫌々やるというよりは、自分たちが楽しくやりたいことは何なのかっていう、そういった発想に持っていくっていうことはやり方としては大事なかなと思います。自分もそうですけれども、婦人会で役が来るというと「ええっ」となるわけです。人数も少なく、3人呼ばれて3人の中で「じゃあ三役決めて」っていうそんなような状況なので、必然的に会計が回ってきて、1年間やってみて、今度慰労会もありますけれども、そこには婦人部に協力してくださった地区の方たちも来てくださって、そういったところで、自分にとってはコミュニティが生まれて、「あっ三浦さんなんだね」と地区の方から言って貰えることもあるわけで。「やってみて良かったな」っていうのは自分でも思うので、そういった地域の役が回ってくるというところも実は大事なかなと思います。

公民館大会の分館のワークの中で、お一人こんなことを言っていた方がいました。「自分のうちの前に新しい家が5軒建つので、これは区に入ってもらわなきゃいけない、家を建てる前の見学に来た時点でお声かけをして、こういうのがあるからねと言ってチラシを渡すだけでは『何これ』となってしまうので、『こういうのがあって、こういった活動するよ』っていういろいろ話しかけた。5軒ある中で3軒、子どもさんがいたおうちには区に入ってくださった」なんていう話がありました。ということは、子どもさんがいるうちっていうのは、PTA活動もあり、そこで子どもを育てていくということで、コミュニティを必要としている方なんだろうと感じました。

メリットがないと捉える世代だとか、家族構成の方たちもいるのかもしれないですけども、面倒で役が回ってきてもできないとか、いろいろあるかもしれませんが、子どもを育てていく上で地域の力を必要としている人たちもいると考えると、そういう人たちが落ちなくきちんとそういったコミュニティで入れるように考えて働きかけを地域でしていくこともこれまたとても大切なのかなと感じます。

○林企画部長

ありがとうございました。では、林委員お願いいたします。

○林教育委員

2点ほど申し上げたいと思います。まず、ムトスぷらざに関してです。高校生の息子にもいろいろ社会教育ということについて、ディスカッションまではいかないですけど、意見を聞いてみました。公民館活動に熱心ではないほうの息子ですけども、それでも小さい頃から私自身が飯田市以外からきた人間ですので、今、三浦委員もおっしゃったように、私自身が子どもを育てていく中で、地域になじみたいというか、地域の力を必要としておりましたので、公民館活動なども比較的積極的に参加してきたほうかなと思います。

そういう中で、息子が言っていたのは、「公民館活動は学校や学校教育みたいにならないでほしい」と。大変失礼ではあるんですが、それは「大人の指示で何かをするっていうばかりじゃつまらない」ということ。親切心だと思うのですが、そういった何かの活動の中で怒られた事というか、押しつけられたりした事もあったと。「そういうことがないほうが自分は嬉しい。子ども同士のつながりを強めて、大人は見守ることに徹してほしい」と。場の提供をしてくれれば良いんじゃないかというのが彼の意見でした。ただ、彼は「お祭りは大好きです」と。地域活動をしているという意識ではなくて、やっぱりお祭りに参加したら楽しい。また、いろんな大人がいて面白い、そういう気持ちがあるようです。

また、高校生になってから、ムトスぷらざの結いスクエア、子どもたちは「結いスク」って呼ぶんですけども、そこへすぐ行くようになりまして。というのは、地域が広がったからなんですね。高校の友達も、電車やバスで通っているお友達が多いですから、じゃあ、どこかで待ち合わせようかっていうと結いスクで一緒に勉強したり、あるいは一緒にゲームをしに行ったりする。外を歩くようなゲームをするのに待ち合わせに使うとか、そんなようなことで。最初に公民館を飯田駅前に移転すると聞いた時に誰が使うんだろうとちょっと考えたりした時もあったのですが、意外と高校生、中学生は、じゃあどこで勉強しようといったときに結いスク行こうみたいなことがさらっと出てくるようです。聞いていていいなと思うのが、真剣に勉強、無言で勉強しましょうっていうスペースもあるのですが、みんなで打ち合わせをしたり、遊んでもいい、おやつを食べてもいい自由に使っていいスペースもあるということで、使い方に広がりが出るなと思いました。その結いスクやムトスぷらざで、勉強のために交流会に参加しましたということではないんですけども、気軽に寄れる場所が今まであまり無かったのかなと思います。市役所の中に勉強をしに来ている子たちもよく見かけましたけれども、気軽にいろいろな目的でちょっと結いスク行こうって言えるのは、とてもいいなと思います。結いスクという場所について割と大成功なのかなと、私自身は感じています。使っていない子ももちろんいるとは思いますが、それが1つ目です。

2つ目は、この間の公民館大会の分科会で、私は第5分科会で育成部、育成活動に携わる方たちと一緒に小さいグループでいろいろお話をさせていただいたのですが、まず最初に発表していただいた下久堅の方がものすごい元気な方で、その後、東野公民館の発表でした。両方ともとにかく大変印象に残ったのが「だめだめ大魔神」という言葉で表現したのですが、何をやろうとしてもこういうことがあるから駄目だ、例えばコロナだからこういうの駄目だと言われがちなんだけれど、とにかくやろうという発表がありました。また、例えば役が回って来た時に、「やらなきゃいけない」じゃなくて、「権利として自分はやった」と。だからもう義務ではなくて自分ができる。下久堅の方はPTA会長もやっていたので、学校と地域を繋げて、もう一緒にやっちゃおうぜということで、「自分の義務じゃなくて権利としてやれるんだ。やっていいんだっていう意識でやりました」というのがとても元気な発表で。またその後小さいグループでお話した時もある公民館の育成部長さんだと思いますけれども、育成活動を月1回企画していたのが「やり過ぎじゃないか」とか、「負担が大きい」という声がとてもあったそうなのですが、その下久堅公民館や東野公民館の発表を聞いて「私もすごく元気になりました。自分がやりたいことをやっていいんだ。力をもらった。」とおっしゃっていました。私自身も楽しさを分かち合うということや、負担を減らしていく工夫は大切ですが「義務じゃなくて権利なんだよ。地域で楽しむ権利がみんなそれぞれにあるんだ。」という話がとても印象に残りました。

また、それぞれの地域での活動も大事ですが、人が少なくなって担い手が少なくなっていく中で、地域にとらわれすぎない、地域の枠を取り払う。公民館でもされていると思いますけれど、お隣の公民館と一緒に共催したり、多世代っていうことも言えると思います。公民館は、お年寄りとか子どもが中心となるのかなと思っていたら、この間の分科会では、子育て世代というか、私たちの30代から50代ぐらいの方も大変たくさん出ていらして、そういった方たちも含めて、多世代、他地域と繋がる、あるいは学校や別の機関と繋がっていくことがすごく大切なんだと学ばせていただきました。以上です。

○林企画部長

予定では、11時半頃までということでしたが、皆様のご都合がよろしければ延長させていただきたいと思います。それでは、野澤委員、お願いいたします。

○野澤教育委員

このムトスぶらざのこの活動はすごくいいなと思って聞いていました。事例をちょっと挙げさせていただくと、私は今、工業会の会長をやっていますけれども、「ネスクイイダ」という組織ができる前にネットワーク何とかという研究会に、まだ専務にもなってない時代に参加していました。若い人の意見を聞こうとって呼ばれたらしいです。それで「こういうことができたらい

などと思うのがあればどんどん何でもいいから挙げてくれ」と。当時、大体みんな創業社長ばかりなんですけれども。「みんなでちょっとお金出し合ってプールしておいて、何か良いアイデアだったらそれを投資に回してもらうような仕組みを作ったほうがいいんじゃないか」とその当時言ったんですよ。そしたらそこにいた社長さんが「そんな事を言うなら、俺が金出してやるからお前は何をやりたいんだ」って。高校生たちがいろいろやっているところに大人が口を出さないでほしいと言いたいことはわかります。結局「何でもいいから言ってくれ」と言ったのに、言ったらそうやって言われた。もう言いたくないじゃないですか。これは良くないなと。

今、ムトスぷらざの活動が、少しずつ盛り上がっているというのは、多分今後の社会教育と言われている分野ではプラスになると思います。市でも I-P o r t といって、アイデア出せばお金を出す仕組みを作られていますけれども、これは私が言ったからではなく、多分どこかで話が出てきて実現した仕組みだと思うのですが、既にもう 30 年近く経っているんですね。当時、そういうことが受け入れられていたらもう少し早くそういう仕組みができたかもしれないと思うと、今の子どもたちの活動はしっかり支えて、じっと見てあげてほしいなというのが 1 つです。

もう 1 つ、中央教育審議会のウェルビーイングという言葉が引っかかる時があります。ここにも書いてあるんですけど、「個人」の幸せ+周囲の「場」のよい状態と書いてあるんですけども、どうも個人に重心がいつちゃっているんじゃないかなというふうに感じるがあります。これは私の祖母の話ですが、祖母は、私の母を含めて 5 人姉妹の子どもを持っていました。自分の娘 5 人を嫁に出すのに絶対長男のところには出さないと心に決めていたらしいです。祖父は早くに亡くなっていましたので、それこそ女手一つで 5 人育てました。なぜ絶対長男のところには嫁に出したくないかという、「自分が長男のところには嫁に来てすごく苦労した。だから娘に苦労させたくない。」と。長女である私の母は幸い次男坊だった父と結ばれましたが、一つ下の次女の叔母は長男坊と出会いかけたので大反対して別れてしまった。三女、四女は、長男ではないところへ嫁に行きました。五女は長男とずっと縁があって、さすがに祖母は折れて、私の一番下の叔母は長男と結婚したのですけれども、苦労してしまっ、40 歳そこそこで脳腫瘍で亡くなりました。それで祖母は、ものすごい悲しがるんですね。結婚を説得したのが私の母とか叔母とかなんですね。

そういうことを思うと、決して個人の幸せが周囲の幸せとイコールにならない。そういうようなことをなんとなく感じるものがあって、ウェルビーイングという言葉だけが躍り出て、「自分さえよければ」というふうになってしまうのはすごく悲しいかなと。ウェルビーイングって社会全体も一つ、家族全体も一つ、地域全体も一つの単位での物語でないといけないんじゃないかなと思うんですけども。私は会社を運営していますけれど、やっぱり自分のことしか考えない人も

いっぱいいるんですよ。もう自分さえ良けりゃほかの社員なんかどうでもいいと言う人がいるんですよ。みんなでやってないと、絶対成り立たないはずなのに、それに気がつかない、相手の立場になれない。このウェルビーイングという言葉で聞く度に、なんとなく全体最適とは言いませんけれど、少なくとも周囲に関わりのある人たちの立場だとか、考えだとか、そういうことを思いやれる人にそれぞれの人がなあってほしいなというふうに思いますね。それがないといけないうんだなと思うと、教育の場でそういうことをきちんと、この人はどんな考え、どんな感情でいるんだろうと慮れるような教育であるべきじゃないかなと思うんですね。その辺がすごくこの社会教育と言っているところには、根幹として大事なんじゃないかなというふうに思います。

○林企画部長

ありがとうございます。それでは、北澤職務代理、お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

地域の担い手を育成していく上での可能性について、大きくはハード面とソフト面のことがあっていると思っています。特にハード面のことで言うと、その地域、生活地域に密着した公民館活動と、それから市民全体、広域を対象にした、今日はあまり話題になっていませんけれど、例えばムトス飯田の枠組みなんかは、今後も本当に大切だなと思っています。公民館の話では、地区の分館、特に住民に密着しているのは、地区直結の分館。それをまとめている20の地区館。そして最後それをさらに統括する飯田市民館というこの流れは一朝一夕にできるものじゃないので、今後もぜひ継続しながらやっていくということが大事だと思っています。

あわせて、ここに先日の公民館大会でいただいた「市民活動団体紹介誌」、これはムトス飯田の事務局で出してくれていて、今年初めてこういう形でできたものを見せてもらいました。一目瞭然で簡潔にそれぞれの活動団体が分かる。市内で登録されている団体だけでもこんな冊子になるほどある。自分たちから一歩踏み出して、住民自治とか、自分たちの活動で地域の皆さんが少しでも豊かになるようにという志を持って動いている皆さんがこんなにいることを、市民の皆さんはあまり知らないでいるかもしれません。これもさっき市長のほうから「行政があんまり手を出しすぎると」という話もありましたけれど、でも、こういう活動には若干行政が手助けをしながら、市民の皆さんの中に広げていくべきものではないかと思います。例えば、こういうムトス飯田のような活動で、そこに関わっているいろんな団体の皆さんを見ていると、キーワードとしてさっき「楽しさ、やってよかった」と申しあげましたけれど、まず「踏み出す」、そして「つながる」、「広がる」という活動の流れがあると思います。その踏み出すというのは、個人や単独の団体の「点」ですけど、活動しているうちにつながって「線」になる。なおかつこの間の公民館大会みたいなああいいうところでさらに広がって「面」になるみたいな経過があると思っています。

特に、一人一人が思っている状態からちょっと興味あるな、一步踏み出してみようかなっていう、その小さなきっかけをどういうふうにつくるかというところが、今日のような社会教育ところでも、学校教育のほうでやっている飯田市のスポーツスクールなどでも課題となる。一步を踏み出してもらおうと、そこからつながっていくのだけれど、その一步を踏み出してもらおうところをどう仕掛けるか、どう声をかけるのか、どこまでハードルを下げるかというのが課題だということはいつも思っているところです。

そんな中で、さっきムトスぷらざの取組を紹介してもらったのですけれど、この間のキャリアフォーラムのときにも、下伊那農業高校の生徒さんがカンボジアに行ったのも、「旅費が半額出るんならいいじゃないと思って気軽に応募した」みたいなこと言っていましたけれど、それが一步踏み出すきっかけで、「いざ踏み出して行ってみたら、自分でも驚くほど主体的な自分に変わっていて、今は地域のことにも参画するような高校生になった」と自分で語っていました。そのきっかけ、踏み出すところをどう後押しできるかというところがポイントだと思っています。

次に、今後の可能性に向けての話です。この間、今年のムトス飯田の若者賞を受賞した「いいらぼ」という高校生たちのグループがあります。発表会を聞いてみると、「スタートは2人で、少しでも飯田のことを知ってほしいという思いから始めたら、だんだん賛同する高校生が増えて、今40人ぐらいが仲間になった」と話していました。同じような話は、この間、キャリアフォーラムのときに発言してくれた飯田女子高校の高校生2人。高校生による高校説明会、テーマ、「高校を売ろう」という催し。私も興味があったのでムトスぷらざで行われた当日を見に行きました。中学生と保護者とを合わせて100名を超える方たちが参加しました。興味を持たれた学校の先生方もたくさん見に来られていました。そこも2人の声かけから始まった。5つの高校から40人ぐらいの実行委員がだんだんと集まってきて始めた。後でアンケート用紙を見せてもらいました。「同世代からの話を聞けて、生の高校が分かった。今後の高校選びの参考にしたい」という感想用紙がいっぱいあった。今後の見通しを聞いてみたら、「今年は5つの高校の分だけしかできなかったけれど、来年は飯伊地区7高校全部から実行委員を募って継続したい」と言っていました。「自分たちは卒業してしまうけれど、後を継いでくれる人たちがいるので、自分は大学生になるけれど、来年は大学から見に来たい」と言っている子たちがいました。

この間の公民館大会の話が、先ほどから話題になっていますが、私が参加した第6分科会は最終的に100名を超える参加者がありました。そのうちの1割以上が中高生でした。中高生も分科会の中の分散会に分かれて参加をしていました。私も一つのグループの司会をしていたのですが、中高生が入ると、大人も良い意味で背筋が伸びるというか、半端なことを言えないというか、かなり真剣に熱いやりとりになって、「やっぱり若者たちが入るといいな」、「活性化するな」と思っ

てその場にいました。

そんな中で、例えば飯田東中の生徒が、グループの中で発言していたのを聞きすると、りんご並木の今後に向けてということですが、飯田市のシンボルになっているりんご並木を、東中生だけが手入れをして、今後もいくというのではなく、生徒数が減少しているということもあるけれど、「これからのことを考えると、他校の中学生たちも一緒に並木に来て、並木の手入れをしながらやっていくというようなことも今後継続していく上では大事じゃないか」という趣旨の発言をしていて、将来に向けてのこともこんなに真剣に考えているのだなと思って聞いていました。生徒数の減少といったことを逆手にとって、まさに「つながり、広がり」という持続可能な並木のあり方を中学生が真剣に考えている。「捨てたもんじゃないな」という思いがありました。

続けて、「つながる、広がる」という例えの話をするのですが、70代近い方が小学生と将棋教室をやっている。「小学生が、中学へ進むと、この子は筋がいいなと思っていてもほとんどやめてしまう。将棋教室へ来る子たちの数も減っていて、募集をかけて、将棋の良さを広めたいが、どうしたらいいか」と、相談を受けた。そこで、「あそこへ行くとヒントをもらえるかもしれないから」とムトスの窓口を紹介した。その方はすぐに相談に行った。その結果、単独で行っていた将棋教室同士がつながって、この3月24日、童王戦（どうおうせん）という将棋大会をすることになった。プラスして将棋教室もやる。チラシも素人が作るの、小学生が手にするのには文字の多い、分かりにくいものを作ってあった。そのチラシもムトスの窓口で見てもらってご指導いただいて、すっきりとした、駐車場の案内まで入った分かりやすいものになった。募集の結果、童王戦の将棋大会に参加する子が60名くらい。将棋教室のほうに参加する子が45人くらいの申し込みがあったということが、そのグループの中で紹介された。それを聞いていた、今までにたくさん活動している方が、具体的には「おもしろ科学工房」の方ですが、「今聞いて、心配なんだけれど、小学生が100人近く来て、3時間は持たないよ」と。「まして将棋だけでどうやってそれを持たせますか」と。「今回は初めての大会で参加したけれど、行ってみたらつまらなかった。来年あっても参加したくないというふうになりかねない」と。その大会を初めてする方が、受け入れる側の人数も限られているし、「どうしたものか」という話になって、そうしたら、おもしろ科学工房の方が、「なんなら私たちが行って、ちょっとマジックみたいなのをやって、子どもたちが飽きないようにすることをお手伝いしましょうか」となりました。すると、同じグループにいた「子どもの本研究会」という方たちも、「私たちもその場で読み聞かせまではできないけれど、子どもの本を持って行って展示して、将棋のその合間に子どもたちがこちら側に来るのはお手伝いできますよ」という話になりました。さらにそこに下久堅の「駄菓子屋かん吾」というグループの方がいて、このグループは、「お祭りなんかは昔懐かしい駄菓子を持って行って、親子やおばあちゃんが来て懐かしいねとつながることを促す」

ようなことをしている。その駄菓子屋かん与さんも、私たちもお手伝いしますよという話になって、グループワークをしている中で4つの団体がまとまって、お手伝いする流れになった。まさに「踏み出す、つながる、広がる」のポイント・ポイントのところで、上手に行政からの助言やお手伝いをしていただくと、可能性が広がっていくものがあるということの例だと思います。

時間もないんですけど、さっき三浦委員や林委員さんも言っていたように、発想の転換が必要な時だと思っていて、冒頭の教育長が「個人の生活を大事にするっていうことがうんと広がっていて、核家族化」という話もあります。そういう時代の流れは変えようがないので、こちらも発想を変えていく必要があると思っていることがいくつかあります。地区の公民館の運動会の話がさっき出ていました。今、昔ながらの運動会を地区でやってもなかなか参加していただけない。私たちの地区の例を紹介すると、運動会ではあるが、内容はペタンクに変えました。しばらく前までは班対抗とかというようなこともやったのですが、それも入れつつ、家族対抗。祖父母、夫婦、子どもでチームにして、家族対抗の部門を入れた。なおかつ、キッチンカーを3台呼んで、昔は景品を用意して配ったのですが、その景品は少なめにして、参加した人全員にキッチンカーの食券としてお配りしたら、大盛況で、地区内のほとんどの家族が参加した。そうすると、あの嫁さんとあの旦那がご夫婦だったとかが初めてわかる。若い世帯が、新たに家を建ててけっこう入区してくれるのですが、年代が離れると同じ地域に暮らしていても分からない。ちょっと発想を変えて企画すると、核家族は家族そろって出てきてくれる。同じような話をもう一つ。すぐ近くの人ですが、その方のところは、10戸で隣組ができています。昔の発想だと1軒から一人ずつ出て親睦会やるのが当たり前だった。そうやって声をかけたら、「ちょっと出られないです」という断りばかり。そこで、地区の公民館を借りて家族全員の懇親会を企画したら、10戸の家族がみんな出てきた。10戸なのにぎやかな集合写真を見せてくれました。若い方たちは、誰かが代表でというよりも、家族全員子ども総ぐるみで参加とするほうが、お家に残ったお母さんが子どもの面倒を見て、ご主人だけ出てくるとかではなく、その負担をお互いに応分に分担しながら、みんながまるごと楽しむみたいところ。さっきのキッチンカーのペタンク大会もそうですけれど、家族全員でといたらたくさん集まって、代表でとしたら集まらない。そういうところを柔軟にニーズを読んでいくようなことが大事ではないかと思っています。

同じことは、さっき地域の役員のなり手がなく、頼みにいっても受けてくれないといったことも、それは自分も散々経験したことです。戸別訪問で頼みに行く。今度この役をやってくれないかと。そうすると大抵は、仕事がとか、体調がとか言われて、3回くらい行っても断られるというパターンがある。そこで、今年私たちの地区ではやり方を変えました。地区の役員を担ってもらわなければいけない60代の皆さん全員に日時を決めて集まっていただいて、そこで今の地区の状況とか、

「今後、勤めていただく役職がこれだけあります」ということを説明した上で、「該当の皆さんの話合いで決めていただけませんか」というようにした。そうしたら、都合がある方は「自分は仕事がある」とか、みんな言うには言うんですけど、「でも、この地区を維持していくためにはどなたかが何かの仕事をやってもらわないと、この人数の中でやってもらわないとこの地区が続かないですよ」という話をしたら、結局みんなお互いにあんたそれ大変だからみたいな話になって、その代わり仕事が忙しいときは欠席もやむなしとか、そういうことをお互いに共通で認めた上でやったら、スムーズに役が決まっていって。これからの役員決めといったことも、戸別訪問で狙い撃ちをしていくとかというやり方だけでなく、合議制といいますか、お互いに課題や事情を共有した上で進めたら爽やかに決まったという経験をしました。小さな経験ですが、こちらで発想を変えて、若い皆さんの力を信じていかないといけないんじゃないか。かつてのやり方で、押しつけるという言い方は変ですけど、半強制のような感じでの決め方は、なかなか受け入れてもらえない時代になっていると思っています。いくつか例を申し上げましたが、若い皆さんの可能性を感じているところです。

○林企画部長

ありがとうございました。関連してご発言ございましたら。野澤委員、どうぞ。

○野澤教育委員

今の話を伺って、すごく思うところが同じだなと思ったのは、こういう活動っていうものの1番最初の一步と言われているのが企画だと思うんですよね。今の童王戦ですとか、例えば童王戦を企画する人がいるから賛同する人がいるっていう感じだと思うんですよね。その企画力っていうのを磨く手立てっていうのが必要なのかなと。新しいことを何かやろうといったときにこんなことやってこんなことやってこういうことをやったほうがいい。これでやっていったらどうだというのはほぼ出てこないです。一番喫緊な例で言うと、飲み会をやろうよって言ったって、どこかの店にする、何時からにする、何人集めれるって事しかなかなか決められないですよ。そういうところが結構私の知っている知り合い多いです。こういうふうにやるからと言ったら、すぐ来るんですよ。「じゃあ、ちょっとやってよ」と言うと、「俺はちょっとできないから」と。多分企画力というのがすごく問われているんじゃないかと。

今おっしゃられた話はほとんどそういう最初の一步になる企画力があるかないかで、そこに賛同する人、呼応する人が集まっているような気がするんですけど、そんなようなことを感じました。

○林企画部長

ありがとうございます。そのほかいかがですか。林委員、どうぞ。

○林教育委員

さっきちょっと言い忘れたことがあるのですが、役員とか、地域の役員、PTAとかも含めてですけど、一つ思っているのは、任せられるということ。こんな役は無理だと思っけていても、お願いされて、仕方ないからやってみるかとなった時に、だんだんとそこで何かが培われていくことも、三浦委員も先ほど地区のことでおっしゃっていましたが、うちも順番で回ってくる地区の役もありますし、あるいはPTAとか地区の代表みたいなものもあります。私は今、小学校と中学校とで地区の町内代表を2つやっけていて、今教育委員もやらさせていただきます。一番最初はやっぱり自分にできるかなとか、怖いな、できるかなという部分がありましたけれども、PTAの学級代表というのは人数が少ない学校ですから必ず一回はやるって決まっていますし、そういったところでだんだんと身についてきました。

私はあまり企画力はないので、そういうのはできそうな人にどんどん任せるといふ形でやらせてもらってますけれども、やっぱり役を与えられると。PTAでもそうですけれども、うまく言えないですけども、今までだったらやれそうな人を選んでやっけてもらおうといふような意識が高かったんですけども、例えばですけども、シングルのご家庭でも、お仕事が忙しい方でも、どんな立場の方でもできるんだよといふふうには、やっぱり組織の側も気持ちといふか、そういう面も変えていかなきゃいけないし、周りの人もどんな人間でもやっけていけるといふように自信を持っけてもらったりする。あるいは今までやっけてことがなくても、やっけてみたらできたといふ経験で、だんだんとみんな地域のことも受け入れていっけてくれるといふ様子を見たことがありますので、そんなことも大事だになって。

○林企画部長

ありがとうございます。三浦委員、どうぞ。

○三浦教育委員

野澤委員から「企画力」といふ話がありましたけれども、自分の地域を見た時に、地域力の中に企画力があるのかな、なんていふところは少し感じたりします。例えば、自分が地域の役をやるように言われるのも、何か強制的に上の組織から言われたといふよりは、地域の先輩から「そういった年齢だから役員を決めるから出ておいで」って言われて、それは当たり前のこととして、地域の中から言われたから当たり前として出て行く。これが例えば公民館など行政や組織、団体などから言われたとかいふことではなくて、自分が帰属する毎日生活している地域の中から言われたから、疑問も持たず出て行っけて、そして何か地域のことに對してやるといふのが当たり前となる。それもまた地域の企画力といふか、そういった地域力だと思います。地域にある組織を見たときに、PTAのような、子どもさんを持っけている方たちの地域をまとめる力はすごいな

っていうところを感じます。どうしてかという、点ではなくて、子どもの成長とともにある線、学校行事等々で地域の中で子どもさんたちを育てる間子どもと一緒にあって親御さんたちも地域のことをやって地域力をつける。私みたいに子どもを持ってない者にとっては、そういった子どもとともに地域で活躍している仲間たちや先輩たちがいることで、「さあ三浦も地区行事に出ておいで」といって、社会教育や公民館活動といったものに呼んでもらって、参加してみたら「ああ、良かったな」って思ったりということがあります。

点ではなく時間の経過がつくった線、ずっと地域の中でその人たちが培ってきた力が根ざしているしっかりした地域だからこそ、そういった地域力がある。なので、上からこうしなさいではなくて、こういった課題があるけれどっていうことを地域の中で投げかけて、地域の人たちが考える中でまた広げていく、その時代に合ったものを広げていく。こういったやり方に逆らうことなくアプローチしていくことが、社会教育、公民館活動に対する市民のやる気を保つ、強化するやり方としては良いのかなと思います。

○林企画部長

ありがとうございます。ほかにご発言よろしいですか。そうしましたら全体を通して教育長からご発言いただければと思います。

○熊谷教育長

時間を超えてご発言をたくさんいただいて、大事なご意見が多かったなと思います。私もお聞きして思ったのは、前例を踏襲するのではなくて、前例も大事なものもあるのでやっぱり全部そのままじゃなくて、一部でもいいから新しく変えてみる。それはニーズだとかということを考えてみたりとか、あるいはやってみたいという思いだとか、わくわくするとか、私は聞いてお得感も大事かなって。なんのメリットがあるんですかって聞かれたときにやっぱりさっきのキッチンカーの食券もそうだと思うんですけど、そういうものがあるような企画をしていく必要があるなということを思いましたし、そういったときに1人の役員の方が悩むのではなくて、少しでも支援できる情報を持っている公的なところが支援できるような、そういうことも大事かなと思いました。そうしたことで、実際やったことが良い体験、楽しい体験、それが積み重なっていくと、それは良い経験になって、次にやる気になったりとか、自分が主体的になれるということを感じました。

最後に、昔は中学生の部活動が忙しいから駄目だったんですけど、今はそうではないので、若者、中高生と一緒に大人とやる場ということも、すごく大人が活性化されて大事なあつていうことも感じました。

○林企画部長

ありがとうございました。それでは本日の全体を踏まえて、市長からごあいさつをいただきたいと思います。

○佐藤市長

今までにない、学校教育ではないテーマをご提案して、非常に活発に意見交換していただいたり、あるいは事前にいろいろと勉強したり、いろんな活動に参加していただいたり非常に良かったな、ありがたいなと思ってお聞きをしていました。

第2クールの中でムトスぷらざの活動の紹介がありましたけれど、ムトスぷらざに公民館と共生・協働推進課が一緒に入っているということに狙いがありました。それがどうなるかは未知数だったのですが、それがいい形で現れつつあるのではないかと感じています。新しい公民館の姿、今までの公民館とはちょっと違う場ができた、できつつあって、それは地縁で集まる人たちだけではなく、志で集まる人たちとの融合というか、化学反応を起こしている。そういった良い動きになっているなということと、ムトスぷらざには中高生が集まっているのがすごく良いなと思っているので、そういう意味でも今後の可能性はすごくあるなと思っています。

それから冒頭、学輪IIDAの話が出てきましたけれども、学輪IIDAの先生方が「飯田の人たちには巻き込まれ力がある」と言っています。それはさっきの三浦委員の話なんだけれど、何か役が与えられたりして、仕方がないなと思って始めるんだけれど、結果としてそれにその人が巻き込まれる。地域の確固たる人材が育っていくみたいな「そういう力が飯田の人たちにはあるんじゃないか」という話があって、そのうまく巻き込むきっかけを与えるという、そういうのがこれから大事なんじゃないかなというのを改めて思いました。今回、少し心配しながらテーマ設定しましたが、結果的にすごく良かったんじゃないかなと思います。学校教育ばかりでなく社会教育を総合教育会議で取り上げる機会をまた作りたいなと思います。ありがとうございました。

4 閉会

○林企画部長

非常に様々な視点からの貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

第2回総合教育会議は以上とさせていただきます。大変ありがとうございました。

閉 会 12 時 00 分